

「私の生まれた日」

人はどのようにして被差別の状況を乗り越えていくのか。いやそもそもそれは可能か。この切実な問いに答えてくれる書があらわれた。作者は一九二七年、広島県の被差別部落に生まれた。戦後の解放運動とともに広がった識字学級で文字を学び、雑誌への投稿を始め、初入選したのは六十二歳のときである。それから汲めども尽きぬ思いを書きつづけてきた。

彼女は三歳で孤児となり叔母の養女になる。小学二年生のとき、トラホームで目を患った彼女のため「三度食うも二度にへらしてもええ」と医療費を捻出する養父母に報いようと、病院までの二時間の道のりを電車に乗らず歩くことを選ぶ。貧しさを幼いながらに肌で感じ、想像力をバネにした確かなやさしさがそこにある。それは親になった彼女が鉄屑拾いをしたとき、幼い手に釘をにぎりしめ差し出す息子へと受け継がれていく。就職や、結婚の場で、彼女は多くの差別にあうが、ときに励まし、力になってくれたのが、同じく厳しい状況に置かれていた在日の人たちであったことも見逃せない。

最終章の『生命の重さ』は胸を打つ。作者はかつて大学生と恋に落ち、私生児を出産した。栄養失調で生ま

言葉で乗り越える差別の苦悩

井上ハツミ著

れたその子はずぐに重い病気にかかると。家柄や血統が穢れていると一方的に吐き捨てられて行った男から、ほとぼりが冷めたころ、そばで書らすことを誘われるが、彼女はきっぱりと断る。わずか一歳で死んでしまつ我が子。もの言わぬ骸を通して、部落差別によって憎しみ合わねばならなかった自分たち世代の苦悩を切々と訴える。とかく押し付けがましくなる経緯譚は、自戒を込めた厳しさとしなやかな感性ゆえ、情緒にもたれることはない。

細かな記憶が木彫りのような簡素な筆致で表現され、人に伝えるだけでない、自己を解放し新しい可能性へ切り開いていく「言葉本来の力」を知らせてくれる。読後、重たさ以上の清涼感が吹き込んでくる稀有な書だ。

評・宮本誠一(NPO法人
夢屋プラネット代表)

解放出版社・13065円



◇いのうえ・はつみ 1927年広島県生まれ。第30回部落解放文学賞受賞。